

器樂的幻覺

梶井基次郎

青空文庫

ある秋^{フランス}仏蘭西から来た年若い^{ピアノリスト}洋琴家がその国の伝統的な技巧で豊富な数の楽曲を冬にかけて演奏して行つたことがあつた。そのなかには独逸^{ドイツ}の古典的な曲目もあつたが、これまで噂ばかりで稀にしか聴けなかつた多くの仏蘭西系統の作品が^{もた}齎らされていた。私が聴いたのは何週間にもわたる六回の連続音楽会であつたが、それはホテルのホールが会場だったので聴衆も少なく、そのため静かなこんもりした感じのなかで聴くことができた。回数を積むにつれて私は会場にも、周囲の聴衆の頭や横顔の恰好にも慣れて、教室へ出るような親しさを感じた。そしてそのような制度の音楽会を好もしく思った。

その終わりに近いあるアーベントのことだった。その日私はいつもにない落ちつきと頭の澄明を自覚しながら会場へはいつた。そして第一部の長いソナタを一小節も聴き落すまいとしながら聴き続けていつた。それが終わったとき、私は自分をそのソナタの全感情のなかに没入させることができたことを感じた。私はその夜床へはいつてからの不眠や、不眠のなかで今の幸福に倍する苦痛をうけなければならないことを予感したが、その時私の陥っていた深い感動にはそれは何の響きも与えなかつた。

休憩の時間が来たとき私は離れた席にいる友達に^{めくば}目眊せをして人びとの肩の間を屋外に

出た。その時間私とその友達とは音楽に何の批評をするでもなく黙り合つて煙草を吸うのだったが、いつの間にか私達の間できまりになつてしまつた各々の孤独ということも、その晩そのときにとつては非常に似つかわしかつた。そうして黙つて氣を鎮めていると私は自分を捕えている強い感動が一種無感動に似た氣持を伴つて來ていることを感じた。煙草を出す。口にくわえる。そして靜かにそれを吹かすのが、いかにも「何の變つたことでもない」感じなのであつた。——燈火を赤く反映している夜空も、そのなかときどき写る青いスパークも。……しかしどこからきこえて來た輕はずみな口笛がいまのソナタに何回も繰り返されるモテイイフを吹いているのをきいたとき、私の心が鋭い嫌惡けんおにかわるのを、私は見た。

休憩の時間を残しながら席に歸つた私は、すいた会場のなかに残っている女の人の顔なごをぼんやり見たりしながら、心がやつと少しずつ寛解して來たのを覚えていた。しかしやがてベルが鳴り、人びとが席に歸つて、元のところへもとの頭が並んでしまうと、それも私にはわからなくなつてしまふのだつた。私の頭はなにか凍つたようで、はじまろうとしている次の曲目をへんに重苦しく感じていた。こんどは主に近代や現代の短い仏蘭西フランスの作品が次つぎに弾かれていった。

演奏者の白い十本の指があるときは泡を嚙^かんで進んでゆく波頭のように、あるときは戯れ合っている家畜のように鍵盤に挑みかかっていた。それがときどき演奏者の意志からも鳴り響いている音楽からも遊離して動いているように感じられた。そうかと思うと私の耳は不意に音楽を離れて、息を凝らして聴き入っている会場の空気に触れたりした。よくあることではじめは気にならなかったが、プログラムが終わりに近づいてゆくにつれてそれはだんだん顕著になって来た。明らかに今夜は変だと私は思った。私は疲れていたのだろうか？ そうではなかった。心は緊張し過ぎるほど緊張していた。一つの曲目が終わって皆が拍手をするとき私は癖で大抵の場合じっとしているのだったが、この夜はことに強^しいられたように凝然としていた。するとどよめきに沸き返りまたすーっと収まってゆく場内の推移が、なにか一つの長い音楽のなかで起ることのように私の心に写りはじめた。

読者は幼時こんな悪^{いたずら}戯をしたことはないか。それは人びとの喧^{けんそう}噪のなかに囲まれているとき、両方の耳に指で栓^{せん}をしてそれを開けたり閉じたりするのである。するとグワウツ——グワウツ——という喧噪の断続とともに人びとの顔がみな無意味に見えてゆく。人びとは誰もそんなことを知らず、またそんななかに陥っている自分に気がつかない。——ちようどそれに似た孤独感が遂に突然の烈しきで私を捕えた。それは演奏者の右手が高い

ピッチのピアノツシモに細かく触れているときだった。人びとは一齐に息を殺してその微妙な音に絶え入っていた。ふとその完全な窒息に眼覚めたとき、愕然と私はしたのだ。

「なんとという不思議だろうこの石化は？　今なら、あの白い手がたとえあの上で殺人を演じて、誰一人叫び出そうとはしないだろう」

私は寸時まえの拍手とざわめきとをあたかも夢のように思い浮かべた。それは私の耳にも目にもまだはつきり残っていた。あんなにざわめいていた人びとが今のこの静けさ——私にはそれが不思議な不思議なことに思えた。そして人びとは誰一人それを疑おうともせずひたむきに音楽を追っている。言いようもないはかなさが私の胸に沁みて来た。私は涯もない孤独を思い浮かべていた。音楽会——音楽会を包んでいる大きな都会——世界……小曲は終わった。木枯のような音が一しきり過ぎていった。そのあととはまたもとの静けさのなかで音楽が鳴り響いていた。もはやすべてが私には無意味だった。幾たびとなく人びとがわつわつとなつてはまたすーつとなつていったことが何を意味していたのか夢のようだった。

最後の拍手とともに人びとが外套と帽子を持って席を立ち始める会の終わりを、私は病気のような寂寥感で人びとの肩に伍して出口の方へ動いて行った。出口の近くで

太い首を持った背広服の肩が私の前へ立った。私はそれが音楽好きで名高い侯爵だということを知った。そしてその服地の匂いが私の寂寥を打ったとき、何事だろう、その威厳に充ちた姿はたちまち萎縮^{いしゆく}してあえなくその場に仆^{たお}れてしまった。私は私の意志からでない同様の犯行を何人もの心に加えることに言いようもない憂鬱を感じながら、玄關に私を待っていた友達と一緒にするために急いだ。その夜私は私達がそれからいつも歩いて出ることになっていた銀座へは行かないで一人家へ歩いて帰った。私の予感していた不眠症が幾晩も私を苦しめたことは言うまでもない。

青空文庫情報

底本：「檸檬・ある心の風景 他二十編」旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

初出：「近代風景」

1928（昭和3）年5月号

※編集部による傍注は省略しました。

入力：j.utyama

校正：福地博文

1998年11月27日公開

2016年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

器乐的幻覚

梶井基次郎

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>